

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

S. R. Brown Colloquial Japaneseの成立事情：  
Lexilogusとの関連を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: カイザー, シュテファン, Kaiser, Stefan メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000254">https://doi.org/10.57529/00000254</a>

# S. R. Brown *Colloquial Japanese*の成立事情

## —Lexilogusとの関連を中心に—

シュテファン カイザー

### 0. はじめに

#### 0. 1. 日本語資料としての先行研究

Samuel Robbins Brown (1810-1880) は、アメリカ人宣教師、聖書翻訳者、教育者などとして、中国周辺や日本を中心に活躍した人物である。著書*Colloquial Japanese* (以下CJ、フルタイトルについては引用文献を参照) は、主として幕末の日本語資料として研究されてきている(加藤・倉島編(1998)、金子(1998)、杉本(2008)など)が、本稿では、向きを変えて、両書の成立事情や種本などの拠り所との関係に注目してその内容について考えてみたい。

#### 0. 2. 成立事情に関する先行研究

このようなアプローチを使った研究には飛田(2010)がある。この論文では、CJを日本で再出版された望洋書屋版との関係を追求しており、また後半ではブラウンの書簡に見える編集事情を明らかにしている。その中にはLexilogusも登場しているが、論文の最後に「Lexilogusと上海版と望洋書屋版とを比較して、その影響関係を考察してみよう。」といい、「次号へつづく」(: 31)と予告しているが、この続編は未だに出版されていないようである。

なお、ブラウン書簡の引用などでは、多少重なる部分もあるが、本論文はCJとLexilogusの関係に重きを置いている。

### 1. 中国周辺、日本における活動の外観

高谷(1965)の略年譜により海外活動を簡単にまとめると、ブラウンは1839年2月にマカオに到着し、モリソン記念学校の校長となり、1841年に中国人向き英語教科書編集のためシンガポールに行き、マラッカの英華学堂にレッグ(この人物については2. 4. 参照)を訪ねる。翌1842年11月にモリソン記念学校が香港に

移され、ブラウンも移る。そして、1847年に婦人病気のため一旦帰米する。

日本には、1859年11月に神奈川に上陸し、1863年に『日英会話篇』(つまり、CJ)を刊行する。1867年に住宅が焼失したため帰国するが、1869年に再び来日し、1969年に新潟英学校の教師となる(同7月辞任)。翌1870年9月、横浜修文館の教師となる。1873年8月に辞任し、ブラウン塾を開く。1877年4月、築地に一致神学校が創立され、ブラウン塾がこれに合流する。1879年、病気のため帰国した。

## 2. CJの成立過程

### 2.1. CJのPreface による情報

CJの成立について、Prefaceには以下の情報がある(訳文、カイザー)。

本著は、出版を一切想定せず到手掛けられたものである。アルファベット順に排列されている部分は、書いたり、修正したりした上で取り除けた状態でたまたま友人に見られ、出版すれば他の日本語学習者には役立つだろうと示唆された。それでも、日本滞在の商業関係の友人が出版の費用を負担するという申し出がなければ、出版の運びには至らなかったかもしれない。その時点で、若干の会話、英日索引、そして文法に関するイントロダクションというアイデアがはじめて浮かんだ。(後略)

### 2.2. CJの体裁と主要部分

まずCJの主な体裁を簡単に紹介する。長い表題にも情報はあがるが、Contentsは以下のようになっている。

#### CONTENTS.

	<i>Page</i>
I. PREFACE	
II. SYSTEM OF NOTATION.	
III. INTRODUCTORY REMARKS ON JAPANESE GRAMMAR	i—lxii
IV. SENTENCES IN ENGLISH AND JAPANESE COLLOQUIAL	1—172
V. DIALOGUES . . . . .	173—196
VI. WEIGHTS AND MEASURES, MONEY &c. . . . .	197—200
VII. ENGLISH—JAPANESE INDEX . . . . .	203—243

図1 CJのContents

Contentsの各項目のページ数から明らかなように、IV. Sentences in English and Japanese Colloquial は172ページと、CJの大半を占めており、本書の根幹を成している（文例の通し番号は、1-1270。ただ、603, 737.に続く文のように、欠番もある）。また上記引用のPrefaceによると、これが最初にできた部分で、他の部分は出版に向けて追加されたということである。

この根幹の部分については、それ以上の情報はPrefaceにはない。ところが、ブラウンの書簡（1860.12.31）には、次の記述がある。高谷編訳（1965）によると、「英語の慣用句の書物を会話体の日本語に訳すことにいたしました。」とある。その書物の名前も書いてあり、「マラッカの英華学堂（Anglo-Japanese College）で出版された『辞典』（Lexilogus）」である。さらに「わたしが一八四一年マラッカを訪ねたとき、レッグを助けて、その「辞典」を広東の口語体に直したことがあります。」とブラウンは言っている。

### 2. 3. CJのタネ本、Lexilogus

このLexilogusは珍しい本のように、国会図書館以外、日本では検索に引かないが、カリフォルニア大学蔵本はダウンロードできる。表題の意味は、「英語・マレー語・中国語のLexilogus: 中国語の福建・広東方言の口語を含む」(引用文献のA Lexilogus...参照)。

Lexilogusという用語は、Oxford English Dictionaryにもなく、訳しようがないが、19世紀頃には、ギリシャ語古典の語彙の語源説や意味を解いた書物の表題にLexilogusという語が見える（Buttmann（1825）がその例である）。また、ネット辞書などにはLexilogusという名称がよく使われている（logusは、ギリシャ語のlogos「ことば」）をラテン語化したもの）。そうした書物は、「辞典」、あるいは辞典に近いものといえるが、本書はどうであろうか。

### 2. 4. Lexilogus (以下、LL) の体裁

本文の最初のページを開くと、以下のような体裁である。

見開きの左のページ（偶数ページ）には、左から英語の短文の後、マレー語（ローマ字表記）、中国語（漢字印刷）による対訳が続く（図2）。なお、英語の行間には、手書きのフランス語訳の書き込みがある。

ENGLISH.	MALAY.	CHINESE.
What's that? <i>Qu'est-ce que c'est que cela?</i>	Apa itu?	那是何也
Be still. <i>Silence. Soyez tranquille.</i>	Diam.	勿出聲
Take care. <i>Prenez garde.</i>	Ingat baik baik.	仔細
Stand up. <i>Levez vous.</i>	Bür-diri.	站起來
Sit still. <i>Assoyez vous tranquillement.</i>	Duduk títap títap.	靜靜坐
Come here. <i>Venez ici.</i>	Mari disini.	靜靜坐 來這裡
Speak louder.	Kata kwát kwát.	亮聲講

図2 Lexilogus本文の冒頭 (左ページ)

こうした対訳が見開きの右のページ (奇数ページ、図3) に続いており、そこにはローマ字表記の福建・広東語、そして最後には広東語に対応すると思われる漢字が筆記体で書いてある。

HOK-KEEN COLLOQUIAL.	CANTON COLLOQUIAL.
Hid-ây sê s'a m'êh á.	Kò tik hai mat yé. <i>的係也野</i>
T'èum t'èum.	Mòk ch'ut shing. <i>莫出聲</i>
Sày jê-sày jê.	Tsz' sai g. <i>子細叮</i>
K'heā k'hé lác.	K'í h'í shan. <i>企起身</i>
Tshēng tshēng tshāy.	Ts'ing ts'ing ts'ò lok. <i>靜靜坐落</i>
Laē tshid-ây ūy.	Joi ní chū. <i>來呢處</i>
K'hāh twā s'ōa kóng.	Tái shing kóng. <i>大聲講</i>

図3 Lexilogus本文の冒頭 (右ページ)

## 2. 5. LLの著者・編集など

LLの表題には、著者名の記述がない。本著のPrefaceによると、本書のベースになっているのは、シンガポールのアメリカン・ミッションのMr. Northが前年 (1840) 暮れに出版した英語とマレー語のフレーズ集である。それに「編集者」が広東語訳をつけることを考えた、とある。(この「編集者」はどうかブラウン書簡にも言及されている「レグ」、James Leggeというスコットランド出身の宣教師、後に有名な中国語学者となる)。さらに、モリソン教育協会のブラウ

ン牧師の指摘と援助を受けて、good Chinese（標準中国語）と、それに対応する2種の方言をローマ字表記でつけることになった、とある。広東語に関しては、中国の教養人のディクテーションをブラウンがブリジマンのローマ字表記を使って書き取った、という。

本書の使用目的に関しては、最後に「主としてつくられた目的は学校での使用で、また中国語の学習を始めようとする人にも役立つと期待される」、とある。

なお、原著者のMr. NorthはAlfred Northのようで、アメリカン・ボード(ABCFM)の印刷工兼宣教師で、1835年にシンガポール入りしてから、マレー語のテキストを収集・出版して活躍した人物である(Proudfoot 2000: 1-2, History of the American Missions 1840: 258)。

## 2. 6. LLは「辞典」ではない

上記引用のブラウン書簡の訳文にある「英語の慣用句の本」はLexilogusの本文には合わない。明治学院大学にある直筆のテキスト(マイクロフィルム)で確認すると、a book of idiomatic English sentencesとある。文例を見てもわかるように、「慣用句」ではなく、「自然な、英語らしい英語の文」といった意味のようである。従って、本書の“Lexilogus”は「辞典」というより、「文例集」とでも訳すべきであろう。なお、飛田(2010: 29)でも高谷訳を批判し、『英語マレー語中国語会話集』などと訳すべきだというのが、Lexilogusは会話文ではなく、CJと同様、独立した文を集めているので、適訳とはいえない。

## 3. LLとCJの対応

まず、図2最初あたりの英語の短文と、CJで対応すると思われる英文とそれに続く日本語文(ローマ字とカタカナ表記の順になっているが、カタカナのみあげる)を並べてみる。なお、周知のように、日本語文の大半は二つのバージョン(フォーマル・インフォーマル)が用意されているが、その場合はインフォーマルな方だけを掲載する(両方掲載の例については、図4参照)。

表1 LL出だしの英語文例とCJの英・日文例

LL	CJ英語	CJ日本語	CJ番
What's that?	What is that?	アレハナニカ	1124.
Be still.	Be still (of noise.) Be still (alking.)	シヅカニシロ。 ダマレ	31.
Take care.	同左	ヨウジンヲシロ	875.
Stand up.	Stand.	タテ	861.
Sit still.	同左	スハツテイロ コシヲカケテイロ	853.

CJ番31の場合、英語としては2つの意味が考えられるので、ブラウンは英文に説明（前者：騒音について、後者：話すことについて）をつけた上で、2つの日本語訳を用意している。なお、LLの中国語訳（勿出聲）は、後者に対応する。

853においても、日本語訳文の後に以下の説明を加えている。

(in the Japanese fashion [日本流に])  
(of sitting in a chair [椅子に座ることについて])

上記の文例は、生徒に対する教室ことば（指示）にも見えるが、そうだとすると共通のテーマや場面が想定できるが、LL全体としては相互無関係の単独文が無秩序に並べられているだけで、やり取りのようなものはほとんどない。

文例の長短でいうと、上記のようなたいへん短い文から次第により長い文へと発展させている。LLの（左半分の）ページ数は総数55ページほどにのぼるが、真ん中辺の50ページから2、3例を拾ってみると、最初より長くなっていることがわかる。ただし、相変わらずほとんど短文である。

表2 LL途中（:50）の文例から

LL	CJ英語	CJ日本語	CJ番
How much do you think it is worth?	同左	オマヘコレハイクラグラインノウチトオモフカ	393.
That we can never do.	同左	ソレハドウモワシドモニハデキヌ	917.
How much does he get a month?	同左	アレハイゲツニキウキンライクラモラウカ	394.
Be quick, or you will lose it.	同左	ハヤクナケレバウシナフ	33.

LLの終わり近くになると、ある程度複雑な文例も現れる。

表3 LL終辺の文例（:104-108）から

LL	CJ英語	CJ日本語	CJ番
I can do it now as well as any time.	同左	ワシハイマスルモノチニスルモオナジコトダ	425.
No matter <i>how</i> you do it, if you only <i>do</i> it.	同左、但し強調なし	ドウデモヨイカラコシラヘサヘスレバヨイ	743.
Put everything to rights before you go to bed.	Put everything in its place before going to bed.	ミナモノラバモトノトコロニカタズケテネロ	778.

#### 4. ブラウンによるLL原文に対する操作・修正

LLでは表1のように基本的に短文が、文脈もなく、無秩序に並んでいる。前掲2.2.の書簡（高谷編訳（1965）では、LLとの関係についてブラウンは次のようにいう。「文の頭の語をアルファベット順に並べて、文章をそろえ、全体の索引をつけるようにしました…」。

##### 4.1. 並べ替え

書簡記述のとおり、CJの最初の文例は、Aで始まる（図4）。

### A

1. *A bow-knot is easy to untie.*  
 Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-u go za-ri-ma-s'.  
 ヒザオリニムスブ ト トケ ヤスウゴザリマス  
 Do. Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-i.  
 ヒザヲリニムスブ ト トケ ヤスイ

図4 CC最初の文例

少し説明を加えると、ローマ字表記では語をハイフンでモーラごとに分けて示している（カタカナの位置も、ローマ字のモーラに合わせてある）。日本語特有の母音[u]を含むモーラ「す」はszという、母音抜きで表記しているが、これはヘボン式ローマ字の *musubu*, *yasuu*, *yasui* などに対応する。なお、後の訳文の前にあるDo.はdittoの略で、「同上」の意味。

上記の1.の文例は、文脈なしでは唐突な印象がある。LLで確認してみると、36ページに次のように見える。

Tie it in a hard knot. (硬い結びにせよ)

A bow knot will be easier to untie. (蝶結びの方がより溶けやすくなる)

LLとしては例外的に、応答形式の形で2文が続いているが、この形では理解しやすい。アルファベット順に並べなおすと、それが見えなくなってしまう（この場合、ペアの最初の文はCJには採用されなかったが）。いずれにせよ、原典のような文脈はないので、CJの筆頭の文には違和感があるが、馴染みのない語彙がいきなり出現していることも関係しているだろう。このCJ訳にある「ヒザオリ」は、Hepburn (1867) の和英の部にはなく、Hepburn (1872) の再販（英和の部）

では、BOW-KNOT, Hiki-musubi. となっているので、「ヒザオリ」の出自が不明で、日本語大辞典にも掲載がない。

なお、上記の書簡の引用のように、「文章を揃え」た例としてみた場合、比較級を普通の形容詞に修正したなどのような変化を指していると考えられる。

なぜブラウンは文の並べ直しを行ったのか。並べ換えた結果、代名詞Heで始まる文は、201.番から345.番までと145文、また一人称のIは409.番から583.番までの175文という具合になってしまっている。無秩序に並べてあるLLを多少ともシステム化しようという狙いはあったのか。LLの掲載順は、ごく短い文例から次第に長く、複雑な文へと発展する方針に見えるが、CJでの並べ替えの結果、そうした難易度の順序も該当しなくなっている。また、アルファベット順といいながら、最初の1字母・1語以外は徹底しておらず、以下のような具合である（セクションIの始まり、409-414.）。

I am not well.

I want it well done.

I want some of each kind.

I am a little deaf.

I have the tooth ache.

I assure you it is not so.

ただ、5.1.で説明しているように、ブラウンはLLの文に対して、似たような文を随所に加えている。その作業は、並べ直した後で行ったと考える方が自然に思えるが、そうだとすれば、似た文章の言い換えで、CJの分量を増やす作業には役立った筈である。

## 4.2. LL文の適応例

LLはもともとマレー語対訳の文例集であるので、当然ながら現地文化が反映された例文があるが、ブラウンはそうした例文にどう編集・修正を加えたのだろうか。

### 4.2.1. 固有名詞の入れ替え、身近なものとの置き換え

(LLの数字はページ番号で、CJのは文例番号。なお、LLの一ページあたりには通常22の文が並んでいる)

LL  
He has gone to Malacca. (:10)

Do you like the durian? (:28)

CJ  
He is gone to Edo. (:204)

Do you like Indian corn? (92.)

Kill that cockroach. (:68)Kill that dragon fly. (697.)

固有名詞や果物など、当時の日本の生活の感覚に合わせて編集している（言い方にも、多少の修正が見える場合もある）。

#### 4. 2. 2. 法律・国際情勢による修正

ご時世というか、現行の法律、国際情勢の変化などに内容を擦り合わせた例文も見える。下記では、英文の後に日本語訳（カイザー）を添えるが、CJではさらにブラウンの日本語訳を漢字仮名で示す。

LL	CJ
Opium doesn't sell very well now. (:50)	Opium, being a contraband article, cannot be imported. (762.)
(阿片は今、あまり売れていない)	(禁制品である阿片は、輸入することはできない)
	アヘンハハットモノダカラウリコム コトハナラヌ
England is at war with China. (:58)	England & China have been at war three times. (138.)
(英国は中国と交戦中である)	(英国と中国は3度交戦した)
	イギリスハカラトサンドタタカツタ

その一方、阿片に関するLLの文がほぼそのまま残されている例もある。

He is an opium eater. (LL: 70)

210. He is fond of opium. アノヒトハアヘンヲスイテタベル。

#### 4. 2. 3. 指示対象の明確化

LL、CJ共通して言えることは、英文には代名詞や指示詞が多用されている点である。ただ、その指示詞は何を指しているのか、はっきりしない場合が多い。それで、ところどころではあるが、ブラウンは手を入れて、指示関係をはっきりさせている。幾つかの種類が区別できる。

##### 4. 2. 3. 1. 中国語訳を参照に明確化

英語では曖昧な代名詞を、中国語訳を参照して、意味をはっきりさせるケース。

She is out of sight. (:24)  
(彼女・船が見えなくなった)

That ship is out of sight. (900.)  
(那船看不見了)(その船…)

英語としては、船を女性代名詞で指すことは一般的ではあるが、LLの文は、当然人間の女性としても解釈が可能であるので、誤解がないように修正したと思われる。

#### 4. 2. 3. 2. 名詞の代入・追加

代名詞の代わりに名詞などを入れたり、追加したりすることで、文脈を与える。

Where did you leave it? (:30)  
(それをどこで置いてきたか)

Where did you leave your penknife?  
(1203.) (お前の小刀)

Don't throw away a single kernel. (:48)  
(一粒も捨てるな)

Don't throw away a single kernel of that bird-seed. (:112)(そのつぶえの)

Can you spare me one? (:70)  
(一つ譲ってくれる?)

Can you not spare me one of those Japanese pencils? (51.) (その日本の鉛筆の)

#### 4. 2. 3. 3. 追加説明を添える

He wants to play all the time. (:40) He (a child) wants to play all the time. (264.)  
アノコドモハイツデモヨクアソビタガル

LLの中国語訳では、「他欲常時頑要」と訳されているが、「頑」はWilliams (1889)によると「玩」の代わりに使われる字で、「玩耍」の意味はto trifle, to dally with; to tempt to vice (戯れる、もてあそぶ、いちゃつく、不道德行為に誘惑する)とある。ブラウンは道徳上問題と考えたためか、当たり障りのない子供の遊びに変えたのである。

#### 4. 3. LLからの文の採用率

確実にLLからとった文(他に、語彙の入れ替えなどで特定しにくいものもあると思われる)を計算すると、CJの80%程度がLLに準拠していることがわかる。それでは、LLからとっていない文例には、どんなものがあるだろうか。

### 5. ブラウンによる追加文例

LLにない文例は、ブラウンによる新たな文例ということになる。それには、LL同様の短い文もあれば、対照的に比べ物にならないほど長いものもある。

### 5. 1. CJをモデルに、反対語などを使った短文の追加

以下の例が示しているように、LLからとった文に似たようなものを加えているのが、短い文の追加の1つのパターンである。

1050. This is a poor soil. コノデンヂハヤセテイル (LL: 82)

1051. This is a rich soil. コノデンヂハコエテイル (LL: ナシ)

806. Read louder. コエヲアゲテヨメ (LL: 2)

807. Read in a lower voice. コエヲヒククシテヨメ (LL: ナシ)

149. Fill it up. イツパイイレロ (LL: 34)

150. Fill it half full. ハンブンイレロ (LL: 34)

151. Fill it a little more than half full. (LL: ナシ)

ハンブンヨリス (ママ、ス) コシヨケイイレハ (ママ、ロ)

動詞などを保持しながら、形容詞を反対義のものに変えるなどの修正を加えた文を追加している。

### 5. 2. LLのモデルに合わない、独自の文例（日本語文、漢字仮名に変えてある）

LLより相当長い文は多く、本著が初心者用の教科書(7参照)だとすると、著者の教育的配慮が疑いたくなる。

40. Bridges are built and the poor are aided, in Japan, with the money derived from fines. (日本では、過料の金で橋を作られます、貧民を救われます)

47. Burning the dead is called kwasoo. (死んだ人を焼くことを火葬という)

78. Cranes & geese abound in the fields of Japan, but it is forbidden to catch them. (日本の田に鶴と雁はタンといるが、御停止だからとることはならぬ)

81. Cuttle-fish are considered a delicacy in Japan. (日本ではタコは好物に思われる)

141. Every Japanese may wear one short sword at pleasure. (日本人は皆脇差を一本差すことは勝手次第になる)

569. If I speak to a Japanese in his own language, he is so surprised that he sometimes does not answer me. (ワシはあるとき日本人にその国の言葉で話したらあの方は変に思って返事をせぬ)

725. Lunatics in Japan are taken care of by their friends if they have any;

if not, they fall into beggary. (日本では気狂は身寄りが世話する、なければ乞食になる)

上記の例は、いずれも日本の文化を紹介した内容となっている。47.のような、単語の内容を説明しただけのものもあるが、他は欧米と異なる風習や社会制度を扱ったものが多く、一部は社会制度の批判的な紹介にも見える。ほとんどはいわば「外からの目線」の文化紹介である。

なお、569.のように、著者自らの経験に基づくと思われるものもある。加藤・倉島編(1998:459)で「例文の中には、明らかにブラウンの体験と結びつくと思われるものがある。」と指摘しているが、569.以外にはそれらしい例は見当たらない(4.1.で述べたように、一人称代名詞のIから始まる文は多いが、その大半はLLからの採用であって、著者による文ではない)。

### 5.3. キリスト教関係の文例

著者ブラウンは宣教師で、聖書の翻訳にも関わった聖職者だったが、当時はまだ禁教時代だったせいも、キリスト教関係の文例はほとんど見当たらない。1270文中わずか2例しか見られない。

180. God governs all things in heaven and earth.

テンチベン (ママ) モットミニカミガラサメラマスル

これは聖書などの語句を直接引用したものではないようだが、「神は万物を創造した」などのような表現は聖書によく見える内容である。一方、724.はマタイ伝5:44からの引用である。以下、英文と日本語訳のカタカナを示すが、句読点がないため、ローマ字ヴァージョンについている句読点を加えた。

724. Love your enemies, bless them that curse you; do good to them that hate you, and pray for them that despitefully use you and persecute you.

アナタヲアダカタクニスルモノヲバ、アナタコレヲカワイガレ、アナタヲワルクイフモノヲ、アナタソレヲヨクイイ、アナタヲウラミルモノヲ、アナタソレヲヨクトリアツカヒ；アナタヲヒドクヲアシラヒ、アナタニガイジヤマラスルモノヲ、アナタコレガタメニカミサマニイノリナサレ。

上記の日本語訳は漢文訓読調で、『論語』などの読み下し文の調子に近い文体だが、英語から訳したものか、あるいはブラウンらが当時手がけていたギリシャ語からの翻訳なのか、定かではない。ヘボン・ブラウンの手によるマタイ伝の最初の日本語訳が完成するのは、本著より10年ほど後で、1873年の『新約聖書馬太傳』で

ある。ただ、海老澤（1981：98-103）が指摘しているように、漢訳が1810年ごろから中国で進められ、モリソンらの訳をさらにブリッジマンらが改定し、1852年に『新訳全書』として上海で出版された。一方、ヘボンの書簡によると、ヘボンは1861年からブラウンとともにマルコ福音伝の翻訳を、日本人の日本語教師と漢訳版を元に、着手していた。また、別のヘボン書簡（1863.4.29）に、マタイ伝を翻訳中であることが述べられている。ただ、これは漢訳からの転訳なのか、原文（英語、ギリシャ文）からの翻訳か、海老澤は未詳だという（海老澤1981：146-147）。

そこでヘボン・ブラウン共訳となっている『新約聖書馬太傳』での訳文、また『新訳全書』での漢訳と比べることとする。（前者には適宜、句読点を補った；また、漢訳の漢字は現行の字体に改めた）。

なんぢらのあだ人をいつくしみ、汝（なんぢ）らをのろふものゝためにさいはひをねがへ、なんぢらをうらむるものによきことをなし、なんぢらにさからふものとちかふことなかれ、天（てん）をさしてちかふなかれ、これ神（かみ）のみくらみなればなり。（新約聖書馬太傳、明治学院大学図書館デジタルアーカイブスによる）

敵爾者愛之、詛爾者祝之、憾爾者善視之、虐遇爾、迫害爾者、爾為之祈祷。（『新約聖書』美華書局1863、明治学院大学図書館デジタルアーカイブスによる）

見比べるとわかるように、CJの訳文は漢訳に近いものである。ブラウンが1840年だいで中国周辺で活躍したころの漢語の知識を生かして、禁教・禁書時代の最中、聖書の引用を含む書物の出版・普及に成功したことになる。CJの印刷は上海であるが、日本ではCJの文例集部分を、望洋書屋版などとして英語学習用に出版した形で普及した（0.2.参照）。

## 6. CJ訳文の方向性

### 6.1. 日本語から英語？

CJを日本語教育の教材の観点から扱った中川（2000：168）は本書の文例集の成立について次のように書いている。

恐らく、先に日本語を収集し、それらに英語で対訳をつけたものをアルファベット順に再編集し直したものと推測する。

見てきたように、CJの文例集はまず8割ほどがLLから採用の英文で、明らかに英文和訳である。では、LLによらない部分についてはどうであろうか。

## 6.2. 「諺」などから考えられる方向性

一部の英語文例の後にはカッコでproverbという情報がある。

142. Evil deeds run a thousand leagues; but good deeds do not go out of one's door. アクジハセンリヲハシル、コウジハモンライデズ。

これは英語の諺ではなく、漢文から日本語に入ったものようである。従って、日本語からの英語訳となる（諺だからこそ、日本語は1バージョンしか示されていないと考えられる）。

しかし、同じ「諺」と断っている145.は形が違う。

145. Exercise of the body is its medicine.

カラダヲウゴカスハミノクスリデゴザリマス

Do. カラダヲウゴカスハミノクスリニナル

こは、簡単には特定できず、どちらの言語からの翻訳にあたるか、現段階では決定できていない。また、「諺」などと断っていない場合にも「名言」・「格言」などが含まれている。次の例は16世紀のイギリス人聖職者トーマス・フラーの有名な言葉なので、英語が原語となる。

873. Suffer wrong rather than do it.

ヒトヲソコナフヨリヒトニソコナハルルガマシトオモヘ

## 6.3. 英語・日本語の自然程度から考えられること

LL由来以外の英語の文章に限って言うと、英語は自然で、英語らしい表現になっているのに対し、対応する日本語は自然とは言えないものが多い。特に、代名詞の過剰使用が目立つ。また、947.や202.の他動詞を日本語の他動詞に訳している点なども、直訳の印象を強くしている。

739. My feet are cold. ワシガアシガヒエル

731. Mark my name on my handkerchief in Japanese characters.

ワシガハナフキヘオマエガニホンモジデワシガナラカイテクダサレ

947. The wind has put the lamp out. カゼガトモシビヲケシタ

202. He struck me with a club. アノヒトガワタクシヲボウデブツタ

以上から考えられることは、CJの文例は概して英語が元で、それをブラウンが(日本人の先生との協力で)日本語に翻訳したことである。ただ、著者が双方向性使用を意識して、指示詞や動詞の自他が両言語で対応する形をとった可能性も否定できない。

## 7. CJの語学教育史上の位置づけ

CJの文例は、独立した文章であることは、LLと共通である。また、対訳形式になっている点も共通している。PrendergastのMastery Systemを利用した、もう一つのブラウンの語学書(Brown (1875))も、独立文を使っており、双方向性の対訳形式になっている。明治学院大学図書館蔵本の見返しには同時代に活躍した、同じ宗派の宣教師フルベッキ(G. Verbeck)による以下の書き入れがある。

In 1963 Dr. S. R. Brown published a similar work, with the Kana writing supplied (ママ); and subsequently his "Mastery System". Both of these books have been extensively used by beginners, native as well as foreign. (1963年にS. R. ブラウン博士は、カナ文字を使った、類似した著書を著した、そして続いて彼の「マステリー・システム」。両著は、日本人であれ外国人であれ、初級者に広く使用された。)

この記述によると、CJも双方向のテキストとして使用されたことになる。また、飛田(2010: 31)がブラウンの書簡(1963.8.25)を引用して示しているように、CJは横浜英学所で日本人学習者に使用された。

中川(2000: 171)では、短い会話文を対訳形式で使用する教授法が、文法訳読法から直接法への橋渡しの役割を果たし、19世紀のヨーロッパのそうした流れをブラウンが感じ取って、“新しい”教材を開発したと推測している。しかし、Howatt/Widdowson(2004: 151ff)が指摘しているように、文法訳読法の特徴はむしろそれ以前のテキスト解説に代わって、例文(単独)の使用と、その例文の双方向性翻訳である。LLの著者・編集者にしても、ブラウンにしても、当時一般的だった文法訳読法をそのまま踏襲した。そういうわけで、新しいアプローチの開発者ではなかったが、その方法を日本語に応用した開拓者といえる。

### 引用文献

*A Lexilogus of the English, Malay and Chinese Languages: comprehending the vernacular idioms of the last in the Hok-Keen and Canton dialect.* Printed at the Anglo-Chinese College Press. Malacca. 1841.

- Brown, S. R. (1863) *Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, together with an English-Japanese Index to Serve as a Vocabulary and an Introduction on the Grammatical Structure of the Language*. By Rev. S. R. Brown A. B. Shanghai: Presbyterian Missionary Press. 1863.
- (1975) *Prendergast's Mastery System, Adapted to the Study of Japanese or English*. By S. R. Brown, D.D. F.R. Wetmore & Co., Publishers; Yokohama, Japan. 1875.
- Buttmann, Ph. (1825) *Lexilogus, oder Beiträge zur griechigen Wort-Erklärung, hauptsächlich für Homer und Hesiod*. Zweite Auflage, Berlin: In der Myliussischen Buchhandlung.
- 海老澤有道 (1981) 『日本の聖書 一聖書和訳の歴史—』日本基督教団出版局
- Hepburn, J.C. (1867) *A Japanese and English Dictionary, with an English and Japanese Index*. Yokohama/London. (Shanghai: Presbyterian Mission Press)
- (1872) *A Japanese and English Dictionary, and English and Japanese Dictionary*. Second Edition. Yokohama/London. (Shanghai: Presbyterian Mission Press)
- History of American Missions to the Heathen, from their Commencement to the Present Time*. Worcester: Published by Spooner Howland. 1840.
- Howatt, A.P.R. with H.G. Widdowson (2004) *A History of English Language Teaching*. Second edition. Oxford University Press.
- 加藤知己・倉島節尚編 (1998) 『幕末の日本語研究 S.R.ブラウン 会話日本語 一複製と翻訳・研究—』三省堂
- 金子弘 (1998) 「電子テキスト化した資料を通してみた幕末・明治初期の「標準日本語」」Soka University, NII-Electronic Library Service
- 中川かず子 (2000) 「明治期における日本語教本の研究 (1) : S.R. ブラウン著"Colloquial Japanese"と日本語教育における意義」北海学園大学人文論集, 15: 147-176.
- 飛田良文 (1962) 「S.R.ブラウンの日本語研究における動詞の問題I・II」国語学48 : 85-92, 49 : 116-120, のち飛驒 (1992)「敬語 : S.R.ブラウンのColloquial JapaneseからPrendergast's Mastery Systemへ」東京語成立史の研究, 東京堂出版, 619-634.
- (2010) 「S・R・ブラウン著"Colloquial Japanese"の成立事情 (1)」東日本英学史研究 : 日本英学史学会東日本支部紀要 9 : 22-33.
- Proudfoot, I. (2000) Malay materials in the Houghton Library. *Kekal Abadi* (Kuala Lumpur), jil. 19 bil. 1 (2000) : 1-14.
- 杉本つとむ (2008) 『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史1549-1868』講談社学術文庫
- 高谷道男編訳 (1965) 『S・R・ブラウン書簡集 : 幕末明治初期宣教記録』日本基督教団出版部
- Williams, S. W. (1874) *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language*. Shanghai: Presbyterian Mission Press. (Ganesha Publishing, 2001).